

医療制度

アメリカには日本の様な個人病院は存在しない。入院病室を有する個人病院はない。開業医は余るほどいるが、アメリカの病院は基本的には施設提供病院であり、医者が自分の患者を入院させたり、緊急の治療を要する患者の為に存在する。施設提供病院であるから最新の医療器具を準備し、専門の技師を採用している。病院の他にレントゲン専門のクリニックがあったり、腎臓石だけを取り除くクリニックや、血液検査、尿検査だけを行なう専門のクリニック等があるが、その殆どが開業医が送る患者が顧客である。

開業医は病院と施設使用契約を結び、病院から割り当てられた時間に病院勤務をし、自分の患者が入院していると、その病院を訪問して診療し、看護婦や病院事務所に対して看護とか投入薬品等の指示を与える。最近になって病院に常勤する医者も増えてきている。又、開業医は最小限必要な医療器具を備えているが、綿密な検診が必要と判断すると、病院へ患者を送ったり、必要に応じて諸々の専門クリニックに自分の患者を送る。手術及び入院が必要な場合、開業医は病院側と月日と時刻を決め、後は病院側が患者と直接連絡を取って全てが決まる。通常、開業医が手術・執刀を担当するが、少なくとも開業医が病院で予定時刻に患者と会う仕組みだ。普通、病院は麻酔専門士、レントゲン技師等手術に必要な人材を準備するが、執刀する医師の要請で必要な他の医師も調達する。

大学病院は日本の大学病院と類似している。組織的に横の関係が綿密で、困難な検診には最適であるが、普通開業医が大学病院を推薦する。大学病院の各専門医は自分の診療室が与えられ、そこで患者を診察する。又、この専門医の殆どは大学で講義を担当しており、それは日本と変わらない。大学病院は設備も最新で色々なメリットがあるが、治療費が高価であるのと、医療保険の限界もある。又、殆どが開業医の個人的な推薦の下でアレンジされるので、勝手に大学病院へ行く事は出来ない。最近、メデカル・センターと称する保険会社が管理する病院が出現し、大学病院的な環境でサービスを施している。いずれにしても全てが予約制。日本も歯科医院は予約制が殆どであるが、開業内科医院とか病院は予約制ではないので、ひどい時は一日を要してたかが風邪を診察する。短気な人であれば、死んで生き返って来ても未だ自分の番が来ないような状態である。

ちなみに私は内科医、心臓専門医、泌尿器医、眼科医、歯科医がいて、緊急な時を除いては少なくとも一年に一度は彼らの診療事務所を訪問していた。全て予約制で日本のように待つ事はなかった。

アメリカには国民健康保険制度が未だなく、公務員、大会社、カジノ興行、デパート職員、銀行職員、大学職員などを除くと、殆どの市民は医療保険を持っていない。個人医療保険料は高い。65才になると社会保障医療保険（Medicare A）が全国民に無条件で無料で与えられる。しかしこれは病院入院費だけに有効で、30%が自己負担である。医者代は別。処方箋薬も別。したがって、65才になったとは言え、医者代保険（Medicare B）に入るとしたら、毎月約100ドル（9,000円）、処方箋保険（Medicare D）も100ドル支払わねばならず、実際の治療費の30%は自己負担である。経済的に余裕のある定

年者は個人保険や会社の定年者保険にて不足分を補うが、やはり大変である。その点、日本は天国と言える。アメリカで一ヶ月も病院に入院すると、個人破産は免れないだろう。しかしアメリカでは軍人や服役軍人は軍が経営する病院に入院すれば家族も無料であるから、これはアメリカでは最高の恩典である。大学病院を付属する大学では職員は定年すると大学病院での費用は全て無料（Medicare A との混合で）となるのでこの恩典も無視出来ない。

医療的な違いとして、アメリカでは出産に際し殆どの男子乳幼児は包茎手術を受ける。これは医療的に義務付けられてはいないが99%の親がその選択をする。日本では成人包茎手術は外科医のドル箱だが、アメリカでは皆無に近い。歯科に関してアメリカ人は歯並びに非常にこだわり、子供のうちに歯列矯正治療を施す。日本の有名な俳優、石原裕次郎は歯列がガタビシヤにもかかわらず何故ハンサムで格好の良い映画俳優だったのかはアメリカ人には理解出来ないのである！

又、身体障害者に対する保護は日本は公共施設的に世界でも最高でその利用価値から判断すると、過保護と云う感がある。アメリカでは交通信号機の他に盲目者の為の特別な汽笛（カッコー等）なるものは皆無である。又、歩道に延々と続く黄色と特別なタイルで識別された施しもない。特に冬季間は全く有名無実となるから、その価値を疑う。